

大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

日想観なれば曇りも波の ～能「弱法師」の舞台をめぐりながら～

◆ 俊徳丸伝説

河内国高安に住む信吉長者の子、俊徳丸は四天王寺の聖霊会で稚児舞を演じることとなった。この舞を見た隣村の薩山長者の娘は俊徳丸に一目惚れし、二人は恋に落ち将来を誓う仲となった。しかし俊徳丸は我が子を信吉長者の跡継ぎにしたいと願う継母から呪いをかけられ、失明させられてしまったうえ、病気になる家から追い出されてしまった。俊徳丸は何とか四天王寺に行き着くものの物乞いする状態にまで成り果てた。この話を聞いた薩山長者の娘は俊徳丸を探しだして再会した。二人が観音に病氣治癒の祈願したところ、俊徳丸の病氣は治り、その後二人は夫婦となって薩山長者の家で幸福な人生を送ったという。俊徳丸伝説は古く、室町時代には既に一般に流布していたと思われる。この伝説は広く人の知られるところとなり、「弱法師」の他、人形浄瑠璃や歌舞伎の「摂州合邦辻」、説経節の「しんとく丸」など多くの演目の題材となった。近代以降も折口信夫が「身毒丸」を著し、寺山修司作・蛭川幸雄演出で「身毒丸」が上演された。

◆ 謡曲「弱法師」

河内の高安に住む高安通俊は、人の告げ口でわが子の俊徳丸を追い出したが、それを後悔して、ある年の二月、功德のため四天王寺で七日間の施しを行った。彼岸の中日、その施行の場に弱法師と呼ばれている盲目の青年が来て施しを受ける。弱法師は物乞いの身ながら、梅の匂いに気持ちを通わす清純な心の持ち主で、四天王寺の縁起を説く曲舞を語って聞かせる。弱法師が俊徳丸であることに気付いた通俊だったが、人目をばばかり、夜になって名乗り出る事に。弱法師は入日の方角の西方極楽浄土を拝み、難波の浦の美しい景色の数々を心眼に受け止めて悟りきった様子だが、盲目の悲しさに時に物狂おしい態も見せるのだった。日が暮れ、一人たずむ彼に父の通俊が話しかける。話しかけられた俊徳丸は我が身を恥じ、逃げてゆくが、通俊はそれに追いつき、彼を家へと連れて帰るのだった。

◆ 義太夫節「摂州合邦辻」(通称:合邦)

河内国の城主、高安左衛門通俊には跡継ぎ候補として二人の子供がいた。一人は、今は亡き正室の子、俊徳丸、もう一人は妾腹の子、次郎丸。俊徳丸が正式な跡継ぎとなっているが、次郎丸一味がそれを嫉み、俊徳丸を殺して自分が家督を継ごうとしている。高安家の現在の妻は、先妻の腰元だったお辻が後妻に入って玉手御前と名乗っている。義理の息子とはあまり歳の差がない玉手は、住吉神社に詣でた折に俊徳丸に恋慕の思いを打ち明ける。俊徳丸にはれっきとした許嫁・浅香姫がいたし、なにより玉手は父の後妻、応じられるわけがない。拒絶されるが、玉手は騙して毒入りの酒を彼に飲ませてしまう。俊徳丸は原因不明の病にかかり、顔はみにくく腫れ上がり、目も見えなくなってしまう。己の姿の醜さと継母の恋を嫌悪した俊徳丸は屋敷を出て行く。天王寺万代池畔の掘立て小屋に住み着くようになった俊徳丸は、後を追って来た浅香姫と再会するが、次郎丸一味に襲われる。そこを四天王寺で説法を行っていた合邦道心が二人を救い、合邦庵主に匿う。合邦夫妻はお辻と玉手御前の両親だった。夜も更けた頃、俊徳丸を追って玉手が里に帰ってくる。玉手は、俊徳丸の行方を探して夫婦にしてくれと両親に頼みこむ。騒ぎを聞いた俊徳丸と浅香姫は逃げようとするが、玉手に見つかってしまう。玉手は、難病は自分が盛った毒を飲ませたせいでと白状する。尚も俊徳丸の手を取って連れて行くこととする玉手に、合邦は堪えきれなくなって娘を刺す。我が子を殺すとは仏門にある身で情けないと嘆く合邦に、苦しい息の下から玉手は、実は恋慕の情は本物ではない、次郎丸の毒手から俊徳丸を守るのと、次郎丸を謀反の罪から救うため自分はわざと不義者になったのだと打ち明けた。さらに、寅の年、寅の日、寅の刻生まれの自分の肝臓の生血を飲ませれば、俊徳丸の病氣も治ると云う。生血を飲んだ俊徳丸は元の姿に戻った。一同が合掌する中、玉手は静かに息を引き取る。その後次郎丸は罰せられ、俊徳丸は家督を継ぐ。玉手の霊を弔うために月江寺が建てられた。

◆ 説経節「しんとくまる」

河内国高安の信吉長者は何の不足もなかったが、子宝にだけは恵まれなかった。そこで夫婦は京都の清水寺に参り、観音に祈願して子を授かった。生まれた男子はしんとく丸と名づけられ、9歳になると信貴の寺に預けられ学問を学んだ。寺で一番の学者となり高安に戻ってきたしんとく丸は、四天王寺の聖霊会で稚児舞を舞うこととなり、客席にいた和泉国近木の庄の薩山長者の娘・乙姫に一目惚れする。乙姫とは文を取り交わして結婚の約束を取りつけ大喜びのしんとく丸だったが、母が亡くなってしまふ。信吉長者はまもなく後妻を迎え、男の子をもうけた。継母はしんとく丸がいるために我が子を跡継ぎにできないのが口惜しく、しんとく丸に呪いをかけた。しんとく丸は呪いのために目が潰れ病となり、四天王寺に捨てられた。悲しみにくれるしんとく丸だったが、清水の観音の夢のお告げに従って、町屋を袖乞いして歩く。瘦せ細ってよめくしんとく丸を見て、人々は弱法師と異名をつけるのだった。再び夢に現れた観音の教えに従い、しんとく丸は熊野の湯に向かう。熊野へ向う途中、近木の庄にて三度清水の観音が旅の道者に姿を変えて現れ、有徳人が修行を出すのを受けようと言う。ならば修行を受けようとしんとく丸は屋敷に向かうが、そこが乙姫の館とは夢にも思わぬ物乞いするところを、昔を知る女房たちに笑われる。病が本復してもこの恥は消えないと絶望したしんとく丸は熊野行きをやめて四天王寺で飢死しようとする。一方乙姫は、しんとく丸の現在の境遇を知り、消息を求めて旅に出た。そして四天王寺で死に切れずにいた彼に巡り会う。乙姫はしんとく丸を連れて清水寺で病の平癒の祈願をしたところ、夢告により病は回復した。信吉長者はしんとく丸を捨ててから目が潰れ、身代も潰してしまい河内国にいたまれなくなった。しんとく丸が目が見えないときに人から受けた恩を返したいと、阿倍野ヶ原で7日間の修行をしているところに、信吉長者たちが施しを受けようとしてきて再会を果たす。しんとく丸は継母と弟を断罪に処した上、信吉長者の目を治し、乙姫共々河内国に戻った。

① 四天王寺

推古天皇元年(593)難波の荒陵に聖徳太子によって創建された。伽藍配置は南大門・中門・塔・金堂・講堂が一直線上に並び四天王寺式配置の典型であり、近年の発掘調査によると、堂塔の位置は創建以来、ほとんど変わらない。数次の災害を受けているが、西門石鳥居は、永仁2年(1294)建立の寺内最古のもので、ほかに本坊方丈・六時堂など元和9年(1623)の建立のものが戦災からも免れて残っている。「扇面法華經冊子」など国宝6件、重要文化財多数を蔵する。

a 西門石鳥居

俊徳丸と父通俊が再会する四天王寺西門石鳥居は、永仁2年(1294)に忍性の手により建立された石造りの大鳥居で、重要文化財に指定されている。中央の扁額には「釈迦如来転法輪処、当極楽土東門中心」と書かれているが、この門は中世浄土思想の影響で西方浄土の東門であると考えられ、ここで彼岸に夕陽を拝し極楽浄土を思うという「日想観(にっそうかん)」の修行がなされたところである。現在でも、春秋の彼岸の中日には、太陽がこの鳥居の中心を通って沈むのを見ることができる。

b 聖霊会(しょうりょうえ)舞楽大法要 -4月22日-

俊徳丸が稚児舞を演じた聖霊会舞楽大法要は、聖徳太子の御霊を慰めるための法要で、六時堂とその前の龜の池にかかる石舞台を中心として豪華な法要と舞楽の一大絵巻が展開される。舞楽は遠くインド、西域地方の影響が強く感じられ、国の重要無形民俗文化財に指定されている。聖徳太子はこの舞楽を仏教普及の手段として利用したといわれ、仏教伝播のルートを窺い知るものである。

c 合邦辻(かつぼうのつじ)閻魔堂

「摂州合邦辻」で舞台となる閻魔堂は、古伝によれば聖徳太子の開基と伝えられており、元は合法と書いて、太子が物部守屋と仏法について論ぜられたところだという。当時の大伽藍は消失して辻堂となった。ちなみに「合邦辻」を分解して「合邦」「お辻」の親娘名となっている。堂の前にはお辻こと玉手御前の碑がある。俊徳丸の難病が治るといふくんだりから病氣平癒を祈願する人が訪れる。

② 難波宮朱雀大路推定地

大道という地名からも推察されるように、この付近を難波宮より南へ延びる朱雀大路が通っていた。難波宮は孝徳天皇の7世紀中頃と聖武天皇の8世紀中頃に上町台地上に造営された都である。難波京と呼ばれるような条坊制があったのかどうかは不明であるが、その存在を示唆するような遺跡(細工谷遺跡)や朱雀大路の痕跡などから、難波宮朱雀門を出て堺市の三国ヶ丘付近まで延びる難波大道が存在していたことはほぼ確実と思われる。道幅は約17～18mあった。難波には難波宮以外にも徳天皇の高津宮が置かれたことが記紀に記述されているが、こちらは所在地も含めて全くの謎である。

<参考> 謡曲「難波」 熊野参籠の臣下が難波の里の梅の木陰で老若二人の男に出会い、名高い難波の梅や仁徳天皇の仁政について教わる。二人は梅の精である木花咲耶姫(このはなさくやひめ)と百濟国の王仁であると明かし姿を消すが、夜再び現れ、舞を舞って天下泰平を祝う。

③ 摂津国分寺跡

聖武天皇は天平13年(741)奈良東大寺を総国分寺、法華寺を総国分尼寺とし、全国に国分寺・国分尼寺をおいた。摂津国分寺については、ほとんど知られることがなかったが、この地域は昔から国分寺の名を伝え、付近から奈良時代の蓮華文や唐草文軒瓦が出土したこともあって、国分寺跡と推定されている。

④ 熊野大神宮跡

熊野参詣のため京より続く熊野街道沿いには多くの社が設けられ、熊野九十九王子と呼ばれた。ここにあった社もその一つであり、上野王子跡とされた。社に並んで国分寺があり、社を氏神、寺を社僧坊と呼び相伝えてきたが、明治維新により神仏分離となった。明治40年(1907)、付近の久保神社に合祀され碑だけが残る。

⑤ 俊徳街道

俊徳丸が高安から四天王寺へ通ったとされる道筋は俊徳道と呼ばれ、治道の広範囲にわたり「俊徳」と冠される施設・旧跡などが点在する。その他の主な関連旧跡・俊徳丸鎗塚(八尾市)・俊徳道(駅名)(東大阪市)・俊徳地蔵(東大阪市)・しゅんとく道道標(生野区、東大阪市、八尾市)

⑥ しんとく丸の道行き

説経節「しんとく丸」では、しんとく丸が捨てられ四天王寺に向かう場面道中の地名が記され、辿ったルートがわかる。仲光承つて、「ここは高安馬場の先、向ひに見ゆるはこわの松・たまこし・みし・上の島・さいべの橋引き渡す。きずるを出で蛇草の露にすぞ濡れていかば渡らん中川の橋と、かやうに詠じたまひ、小橋・木村・つかわしやま・つてを打ち過ぎて、天王寺と、南の門にお着きある。」

⑨ 折口信夫文学碑

折口信夫(1887～1953)は、浪速区で生まれ、釈 迦空(しゃくちょうくう)の名で知られている歌人で、万葉学者であり文学博士であった。明治の末、天王寺中学校在籍の頃より、大阪近郊の名所旧跡の地理に詳しく、放課後や日曜日などには友人とよくこの辺を散歩していたという。この文学碑には、「小橋過ぎ 鶴橋生野来る道は古道と思ふ 見覚えのなき」と生野を詠んだ歌が彫られている。『身毒丸』は大正6年(1917)に発表された。

⑧ 御勝山古墳

もとは岡山と呼ばれ、元和元年(1615)夏の陣の大坂落城のとき、徳川秀忠がここで戦勝の宴を催したことから御勝山の名で知られるようになった。南北112m、東西55m、高さ約8mの前方後円墳で5世紀のもの。現在は前方部が勝山通と御勝山南公園になっており、後円部を残すのみとなっている。被葬者は不明。説経節「しんとく丸」で、「つかわしやま」とあるのがここではないかと推測されている。

⑦ 生野区と銭湯

生野区は全国一の風呂屋王国。最盛期には区内に92軒の銭湯がひしめき合っていた。

【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩きの資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局 電話06-6282-5930(財団法人大阪観光コンベンション協会内)「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。 <http://www.osaka-asobo.jp> または **大阪あそ歩** でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。